大学祭の魔法

ホチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大学祭の魔法

【Nコード】

N7148I

【作者名】

ホチ

【あらすじ】

「学祭マジック」なるものをご存じだろうか。

大学祭の準備から始まり、本番、そして後夜祭までの期間、奇妙な一体感とそれっぽい雰囲気少なからず発生する。そしてその勢いにまかせて想い人に告白し、見事恋人同士になれる。それが学祭マジックである。

マジックと言わしめる所以は、成功率が異常なまでに高い点からである。

そして、赤川瑞人もその魔法にあやかろうとしている一人だ
った。

大学祭準備

「学祭マジック」なるものをご存じだろうか。

大学祭の準備から始まり、本番、そして後夜祭までの期間、奇妙な一体感とそれっぽい雰囲気少なからず発生する。そしてその勢いにまかせて想い人に告白し、見事恋人同士になれる。それが学祭マジックである。

マジックと言わしめる所以は、成功率が異常なまでに高い点からである。

そして、赤川瑞人もその魔法にあやかろうとしている一人だった。

「柚木がいないみだけだけど、あいつどうしたの？」

「あれ？アカさん聞いてなかったんですか？カナエ先輩なら今日はバイトって言ってましたよ」

「バイトお？この大詰めにか！？」

赤川は後輩に悪態をつきつつ同輩の柚木かなえにメールを打った。大学祭二日前に柚木に抜けられるのは痛い。赤川が部長を務めるサークル「フランス語研究会」に所属する三年生は赤川と柚木のふたりぼっちだった。つまり、指示を出す最上学年は四年生がとくに引退した今、ここには赤川ひとりしか残されていないかった。このときばかりは同学年がふたりであることを赤川は呪った。

「アカさん、カナエ先輩がこれをアカさんに渡してくれって」

遅れてやってきたさつきとは別の後輩の女子はそう言って赤川に柚木に頼まれたものを渡した。財布だった。

「マジかよ……」

これも俺がするのかよ。

赤川が部長なら柚木はサークルの元締め、会計だった。そう、柚

木は赤川に会計の仕事も投げたのだ。

そのとき赤川のケータイに柚木からの返事が来た。

（ごめん！どうしてもバイト休めなかった。今日はよろしく願い。今度おごる）

「そういつてこれまで俺に一度でも奢ったことがあったか？」

赤川は不満たらたらであつたが、それでも（今日だけだからな）とメールを打ち返し、赤川はケータイをポケットに戻した。出店の設営テントはまだだが、今日は食料、その他諸々の買い出しを予定した財布大活躍の日だつた。

「頼むぜ柚木さんよお……」

独り言を呟いた赤川は、部室に集まつた後輩に本日の段取りを「柚木が逃げた」ことを含めて伝え始めた。

「昨日はマジでごめん」

大学祭二日前の昼休みの部室。扉を開け部屋の中の赤川を確認し次第柚木は頭を下げた。あの柚木が素直に頭を下げる、そのあまりの行為の珍しさに赤川の「なんと行ってやろう」という怒りはどこかに消えた。部室にいた後輩たちも赤川同様驚いていた。

「やけに素直だけど、どうした？明日は雨か？」

柚木につむじを見ながらふざけた口調で赤川は訊いた。なんだか居心地が悪く、背中がムズムズする。いつものようになんだかんだと言いつつから始めてもらいたかつた。

「わたしにとつても最後の学祭なんだから、穴を空けずにしつかりやりたかつたんだよ。アカだけに任せるのはさすがに悪いとも思つたし、わたしとアカふたりでまとめなきゃいけないのもわかつてるつもり。だけどバイトのシフトに急に穴が空いちゃってね、店長に泣きつかれちゃつたの。そうするとわたしもそこでのバイト長いわけだし？簡単に断るわけにもいかないでしょ。あ、だけど学祭終わるまではもう絶対に無理って言っておいたから。もう休まないか

ら。だから、ね？ごめん。それにアカならわたしがいなくても大丈夫かな？なんてね」

「なんだ、いつも通りじゃん」

「え、何が？」

「なんでもない。こつちの話」

赤川は「何よ？」訊きたがっている柚木を無視して内心ホツとしていた。頭を下げるなんて始めはぎよつとしたが、柚木はいつも通り饒舌に言い訳をかましてくれた。元気な証拠だ。そして、素直に謝るほど今年の大学祭を大切に思っていてくれることが嬉しかった。

赤川は柚木が自分と同じくふたりで舵を取る最後の大学祭を大切に思っていてくれたことが嬉しかった。

「ところでさ、本当に奢ってくれるわけ？」

「何の話だっけ？」

柚木は昨日の今日にして見事に話をしらばくれた。

「もういいよ、こうなることはわかっていたし」

「嘘だよ、今回こそは奢ってあげる。昨日は店長がバイト代に色付けてくれたから。帰りがけにサービスで二千円もらえたんだ」

「気前のいい店長だな。柚木に気でもあるんじゃないの？」

「バカね、店長は女性よ。気に入られるのは本当だけだね。わたし優秀だしさ」

「よく言うよ。前期のテスト落としたくせに」

赤川も人のことは言えた口ではなかったが、柚木が落とした授業の単位は取れていた。最近をよくその話をネタにしていた。

「うっさいわね。わたしは社会的に優秀なの。あんなジジイの授業意味ないわよ。で、何か奢って欲しいものあるの？」

「そうだなあ……それじゃあ学祭終わったら晩飯奢ってくれよ。学祭間近だろ？後輩と帰りにメシに行ったりするから近頃出費が半端なくてさ」

「わたしも同じようなもんだけどね。けど了解。学祭終わったら

夕飯奢ってあげる」

「助かる」

「いいわよ、もともとわたしが悪かったわけだし」

「それもそうか。奢ってやっても奢ってもらうのも初めてだしな」

「その一言は余計よ」ムスツと柚木は窓の方を向いた。「それはそうとアカ、財布よこしなさいよ」

「財布？俺の？」

は？という顔をして柚木はまたこちらを向いた。「何言ってるのよ、サークルのよ」

すっかり忘れていた。赤川は鞆から領収書の詰まった財布を取り出した。

「焼き鳥の食材とかその他諸々の領収書、とりあえず全部もらっておいた。だけどよくわからなかったからまとめて全部財布にぶち込んでおいた」

赤川たちフランス語研究会は大学祭では毎年恒例ベタだが焼き鳥を販売していた。これでもなかなか学内では評判で、売上も毎年なかなかのものだった。

「買っ量が多かつたからこうなることは予想してたけど、これは酷いわね……しかもグチャグチャだし」

「そこはゴメン。始めのうちはきちんと揃えていたんだけど、買出し班が帰ってくる度にどんどん増えて、それどころじゃなくなつた」

「……まあいいけど」

そう言つて柚木は領収書の束を部室の机に広げ、ノートに何か書いたり電卓を叩き黙々と作業を始めた。その速度たるや、基本面倒くさがりの柚木からは想像できないものだった。

「カナエ先輩すごいっすね」

部室で昼食を食べていた後輩たちが赤川に小さい声で話しかけた。「うん、俺も驚いてる」

赤川も思わず小さい声で返事をした。茶々をいれることはもちろ

ん、声を発することすら躊躇わせるほど柚木は集中していた。なるほど、優秀なのは案外本当かもしれない。

「別に普通に話していていいよ」

ノートとにらめっこしていたまま柚木は言った。

「そう？なんか悪いな」

そうは言ったものの、柚木の作業が終わるまでの十分くらいの間、赤川たちの会話は弾まなかった。

「 終了つと」

「 お疲れさまでした」

柚木が伸びをしたのに合わせて赤川たちは口を揃えて柚木を労った。

「 ヤバ、もうこんな時間。ゆっくり昼ご飯食べてる余裕なくなっちゃたじゃん」

言いつつ柚木は買ってきたパンを口に押しやりお茶で流し込んだ。

「 まだ焦るほどの時間じゃないだろ」

「 次の授業で使うプリントまだ印刷してないんだよね。それじゃまた放課後に！」

部室の扉を閉めることもなく柚木は去って行った。

その日の放課後の準備は柚木も参加し、昨日の遅れを取り戻すかのように順調に作業は進んだ。

赤川は柚木の存在に改めて感謝した。そして、柚木がいるだけでこれほど自分のモチベーションが高くなることに驚いていた。実を言うと赤川は昨日は柚木がいない、それだけの理由で締まらなかった。考えてみると入学当初からずっと赤川はイベント事には柚木と一緒に行動していた。柚木がいないだけでこれほど自分が左右される。柚木の存在がこれほど大きかったことに赤川はひとりおののい

た。その動揺のせいで途中赤川は「サボるな」とローキックを食らわされたくらいだった。

大学祭前日は大学の講義も全て休講となり、準備日として宛てがわれていた。

テント設営、ガスボンベの調達、その他諸々諸々。あつと言う間に時間は過ぎたが、それでも赤川たちはなんとか明日販売出来る状態にまで持つてくる事が出来た。

夜、明日の繁盛を願っての飲み会が開かれることになったが、赤川は部長にも関わらずそれを辞退した。去年そこで調子に乗りすぎ、次の日の大学祭初日を体調最悪で迎えてしまった嫌な記憶が蘇ったからだ。同三年生柚木かなえも赤川と全く同じ理由で飲み会を辞退した。

大学祭準備（後書き）

読んでくださってありがとうございました！残り半分付き合ってください

大学祭本番

翌日、大学祭は始まった。体調最悪の顔をした何人かの後輩を尻目に赤川たちは焼き鳥の販売に精を出した。途中四年生の先輩や卒業したOG・OBも買い（遊び）に顔を出し、売上の方も上々だった。

「本日の総売上は、万円でした。このペースであと二日売れたら打ち上げ代は全員タダでいけそう」大学祭初日終了後、部室で会計柚木の発表に部員たちが歓声をあげる。「さらに！明日の祝日も頑張れたら、いよいよ我が部室にも待望のWiiが置かれそうです！」

オオツーと歓声は一段と大きくなり、部員たちは口々に希望のソフトを挙げた。

「ソフトまでは無理。それはカンパになると思う」

「とにかく明日はWii目標に売るしかないな」赤川は引き継ぐ。「それでは明日の健闘を祈って、残れる奴で景気付けに飲んでいくか！」

「アカさん、学祭マジックって知ってますか？」

飲み会の最中、トイレで用をたしていた赤川の後に来た後輩が突然訊いてきた。

「学祭マジック？何だそれ？」

「いや、マジックっていうのはアレですけど、要は学祭期間はカップルになりやすいつてやつですよ」

「ああ、たしかにこの時期は特に多いよな。俺の友達にも何人かいるし、先輩でもいたな」

「僕らの中にもいたんですよ」

そう言っただけで先輩はフランス語研究会内でのカップルを二組挙げた。「マジで！？全然知らなかった……」

「そりゃそうですね、僕も知ったの最近ですもん」

「でもいいのか言っちゃって。秘密じゃないの？」

「そう言われましたけど、時効ですよそんなもの。何せ去年の今ですからね。一年秘密にしてたら十分ですよ」

「それもそうだな。去年ってことはあいつら付き合ってもう一年か……気づけなかったな」

後輩の恋愛事情をまったく知らない。それはそれで赤川は悲しかった。先輩にくらい打ち明けてくれてもいいものなのに。

「アカさんはどうなんですか？」

用はとつくに済んでいたまま話し込んでいたが、自分の話になり赤川は手を洗いに逃げた。「俺はそんなのないよ。まったく羨ましい限りさ」

「カナエ先輩とはどうなんですか？仲良いじゃないですか」

後輩も手を洗いにきてきた。本命はどうやら赤川にこのことを訊くことらしかった。

「俺と柚木はそんな関係にはならないよ、もう三年何も無いんだぜ？」

「だからこそ今ですよ。学祭マジックにあやかるとです」

「その気がなきゃ意味ないだろ」

「それはそうなんですけど……それはそうとアカさんってカナエ先輩を名前で呼ばないですよ、一度訊いてみたかったですかど、何でなんですか？アカさんだけです、名字で呼んでるの」

「……タイミングってやつかな」赤川は手を拭きながら鏡で自分の顔を確認した。赤くなっただけじゃなかった。どうやらうまくごまかしているようだ。「それだけだよ」

そうして赤川は後輩から逃げるようにトイレを出た。

後輩も特にそれ以上気にする様子もなく、その後その話がぶり返されることはなかったことに赤川は安堵した。

「カナエ、ね……」

部屋の布団の中で赤川は柚木の名前を声に出してみた。

赤川はみんなが呼ぶように柚木をカナエとは呼べなかった。トイレで後輩に言ったように、タイミングを逸したとしか言いようがない。先輩はいい、「ちゃん」付けさえすれば。後輩も「さん」「先輩」付けすればそれでいい。では自分は？同期の赤川にその手は使えなかった。そして、男子校出身で女子馴れしてしていなかった赤川に妹以外の女子を名前を呼び捨てで呼ぶような度胸はなかった。

何度か変えてみようかと挑戦したこともあった。しかし「何よ、気味悪いわね」という柚木の反応にすっかり赤川は萎えてしまった。

それに一度呼び方が定着してしまうと、気味が悪いごもつとも。気恥ずかしさが先行してなかなか呼び方は変えられるものではなかった。

だがもう三年が経った。いくらなんでもそろそろいいのではないか。むしろ、名字のままでは逆によそしいのではないか。そんなことを考えていたせいで、赤川の就寝時間は酒の体にも関わらずいつもより一時間延びた。

大学祭二日目。Wiiのため、あわよくばソフトのために赤川たちは一丸となり焼き鳥を売りに売った。途中鳥肉が足りなくなりそうになるハプニングにも見舞われたが、なんとか乗り切り、目標の金額に達成した。

その日の飲みは、日中の疲れも重なり、赤川の酔いの回りは早かった。

帰りの電車の中、赤川は死ぬほど後悔した。

酔ってなかったらあんな行為には絶対及ばなかったのに　　よりにもよって酔った勢いで。

「どこ行くのよ？」 柚木もかなり酔っていた。

「ちよっと話したいことがあってさ」

飲み会の最中、赤川は柚木を連れだして部室棟の一番奥の階段の踊り場に連れ出した。

「どうしたの、こんなとこまで連れてきて」

「大事な話なんだって」

「あゝ、わたしたちが引退するときの後輩に送るプレゼントのこと？ それなら確かにみんなの前じゃ話しづらいよね。けどその話はまだ時期が早いし、別に今日でなくてもよくない？」

「違う、その話じゃない。……なあ柚木、学祭マジックって知ってるか？」

「あゝ知ってるよ。みんなこの時期に付き合いだすやつでしょ？ あの子たちもそれで付き合いだしたもんね」

「柚木知ってるのか？」

「知ってるも何も。けしかけたのわたしだし」

「なんだよそれ？ それなら教えてくれてもよかったのに。俺なんて知ったの昨日だぞ」

「誰にも言わないでって口止めされてたからね。後輩の秘密は守ってあげなきゃ」 柚木はにやりと笑った。「それで？ プレゼントの話じゃないなら何の話？」

「あゝ、……あれだ。俺も学祭マジックにあやかってみようかな」
「ウソ！ 誰？ 誰に告んの？」

柚木が「協力するよ」を言う前に赤川は言った。

「お前」

その後のことは赤川は思い出したくなかった。

お互い酔いが一気に醒め、無言は重苦しい空気を作った。その空気に先に負けたのは、情けないことに赤川の方だった。

「悪い。変なこと口走った……今日は先帰るわ。あとよろしく頼むな」

また明日。とは言えなかった。赤川は逃げるように部室の鞆を取り、そのまま今揺られている電車に飛び乗った。

あのときの柚木の顔を見たとき、赤川の酔った頭に冷や水を掛けられたようだった。目が点とはああいうのをたとえたのだろう。

学祭マジックなんか頼らなきゃよかった……赤川は鍵で家の扉を開けてもなおそのことばかり繰り返し考えていた。

何度休もうか悩んだかわからないほど悩んだ末、赤川は部長という立場を考え、大学祭最終日におずおずと大学にやって来た。

柚木もすでに設営テントに来ていたが、お互いの気まずさのあまり顔も合わせなかった。

焼き鳥を売っている間は、目を合わせることなく必要最低限の会話のみふたりは行った。後輩の何人かには、昨日の飲み会でケンカでもしたものだど妙に気を使わ、赤川はいたたまれなかった。

それでも幸いなことに焼き鳥の売上は最終日も順調で、夕方には見事完売を果たし、柚木の計算の結果、その後の店を予約した打ち上げは無料、そしてWiiも無事購入出来ることになった。

「学祭終了お疲れさまでした！カンパニー！」

「カンパニー！」

赤川の音頭で大学祭打ち上げが始まり、池袋にある飲み屋の一室は一気に活気付いた。

「アカさん、お疲れさまでした」

後輩が赤川を労いビールを注ぐ。

「ありがとう。俺と柚木はこれで実質の活動は引退だから、後は任せただけだから」

「そんなこと言わないで部屋にも顔を出してくださいよ」
「もちろんそうさせてもらうよ」
「それで奢ってくださいね」
「それはない」

各自出来上がりつつある頃、柚木が赤川の隣に座ろうとやってきた。赤川は内心ビビったが、平静を装うと努力した。

「おう柚木、お疲れ」

「アカもお疲れさん」

そう言っただけは小さく乾杯をした。

「終わっちゃたな、学祭」

「まだ明日の片付けが残ってるよ」

「それはそうだけどさ、俺たち三年生もいよいよ就活だよな」

「今はそんなこと言わないでよ、酒が不味くなる」

「悪い」

そう言っただけはふたりの会話は途切れた。時折後輩たちのコールに合いの手を出す、あとはふたりともチビチビと酒を口に運ぶだけだった。

先に動いたのは今回は柚木の方だった。

「昨日のことだけどさ……」

「ああ、あれな。忘れてくれ。昨日は酔ってたからさ。俺も何言っただかほとんど覚えてねーんだ」

嘘だった。本当は一語一句覚えていた。

「そうなんだ……。実はわたしもなんだ。あんまし覚えてない」
互いに嘘なのはバレバレだった。だが、そうでもしないと場が保たなかった。

「それにさ、俺らに限ってあるわけないよな。三年も何もなかったわけだし」

「だよ。アカなんて未だにわたしのこと 名前で呼んでくれないしさ」

「柚木……気にしてたのか？」

「初めだけ。唯一の同期が名字で呼んでくるって結構寂しいもんよ。もう馴れちゃったけどね」

「そうだったのか。ごめんな、ほら、俺男子校出身だろ？どうしてもいきなり名前はハードル高すぎた」

「知ってる。いろいろとそのことで悩んでたっばいことも」

「別にそんなことで悩んだりはしねーよ」

「凶星を突かれて赤川は少し動揺した。だが次の一言にそんなことも消し飛んだ。

「だけどさ、付き合うなら名前で呼んでもらわなくっちゃね」

「……え？」

「ね、二次会はないで、ふたりでどこか行っちゃおうか？わたしたちは今日でどうせ事実上の引退だし、後は後輩に任せちゃってさ。アカには奢る約束もしてたし、わたし奢っちゃうよ、二千円分」

柚木の提案に赤川は声を出せずに、頷くことしかできなかった。

飲み放題の時間が終わり、これから二次会へという流れの中、赤川と柚木は次期部長に「抜けるから後は次の代に任せた」と告げた。次期部長は意味ありげな笑みは浮かべたが、「任せてください」と言っただけで余計な詮索はしてこなかった（二次会でなんと言われるかは別だが）。そして赤川と柚木、ふたりは池袋の街に消えた。

そしてそこから二時間後、赤川はもう柚木とは呼ばなかった。

「学祭マジック」なるものをご存じだろうか。

大学祭の準備から始まり、本番、そして後夜祭までの期間、奇妙な一体感とそれっぽい雰囲気は少なからず発生する。そしてその勢いにまかせて想い人に告白し、見事恋人同士になれる。それが学

祭マジックである。

マジックと言わしめる所以は、成功率が異常なまでに高い点からである。

そして、赤川瑞人もその魔法にあやかった一人になった。

大学祭本番（後書き）

最後まで付き合ってください、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7148i/>

大学祭の魔法

2010年10月11日15時21分発行